



外国人として

今まで、頼れる人も貯金もない状態からスタートし、言葉も文化もほとんど知らない地で、0からどう生き延びて来られたか、自分でも不思議に思えてくることがあります。今でも、言語の壁にぶち当たると劣等感に浸る場面や（すぐに開き直りますが）、外国人であるがゆえに物事がうまく運ばなかったりすることもあります。「郷に入っては、郷に従え」痛いほど、身に染みる言葉です。この言葉は、おそらく世界共通で使われ、理解されてきたことであろうし、移民を大勢受け入れた英国人も、彼らにその姿勢を期待するのは当然のことかもしれません。「私たちの国に来たのだから、せめて私たちの言語と文化を理解するのは、当たり前だろう」と。自分自身も、それを十分わきまえた上で、移住したつもりです。

渡英した当時は、毎日がカルチャーショックの連続でした。たとえば、コンビニやレストランの店員は、どうしてこんなに無礼で雑なのかや / 普段は道端で赤の他人に対して「ソーリーソーリー」と連発する彼ら（英国人）が、実際、自分に非がある問題に直面すると、決して謝ろうとしなかったり（人にもよりますが） / 日本語の感覚で、感謝の気持ちを相手に伝えたくても、日本語ほど感謝と敬意の重みを表現できる言い回しが英語で存在しないため、どうしても手抜き言葉にしか私には聞こえず、人への返答に困ったり / 私から見た「外国人（英国人を含む）」は、なにゆえ、何

事にもオーバーリアクションをするのか、オーバーなゆえに彼らの反応が嘘っぽく見えてしまったりなど（今は慣れてオーバーとは感じません）、例を挙げると切りがないのですが、理解し難いことだらけで、日々気疲れしていたのを覚えています。今考えると、日本と英国の価値観やマナーのギャップに、違和感はまだしも、多少の苛立ちを覚えたことがあったのを振り返ると、「自分はちっぽけだったなあ」と思えます。人と違うのは当たり前、社会の場で自分の意見をもち、主張すること、他人の目をいちいち気にしないことは当たり前という、日本とはまるで正反対に見えるこの環境で、即座に「郷に従え」と迫られても、私はそれなりの時間がかかりました。

カルチャーショックは悪いものではないし、文化や生活、態度の違いを受け入れる器の大きさが試される良い機会なのかもしれません。先ほど挙げたカルチャーショックの例ですが、今ではほとんど違和感を感じません。いくらイングリッシュナイズ（英国化）されたと言われても、私の中の日本人的感覚を取り消すことは不可能ですし、日本人の良き質とマナーは忘れずにいつまでも心得ていたいものです。

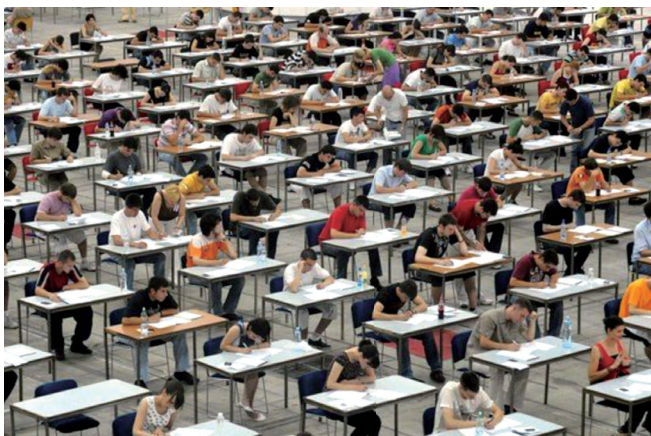
なぜ今日になって、渡英した当時の感覚がフラッシュバックしたかという、本日、ほぼ10年ぶりに英語試験IELTSを受験したからでしょう。これを受けた理由は、また次の機会に綴らせていただきます

が、公式試験を受けるという久しぶりの緊張感と、渡英したばかりの学生や外国人に囲まれた試験場の雰囲気の中で、私は十数年前にタイムスリップしたかのような、懐かしさと違和感がふ

と蘇ってきました。特に組織的、官僚的プロセスの中で行われる試験は、ビザ延長のために何度も足を運んだ国役所の雰囲気似ていて、検査・取り調べを受ける前のなんとも言い難い緊張と圧迫感がありました。まるで、自分の存在価値の判決が下されるようで、正直、あまり心地が良くなく、なるべく避けたい環境です。舞台現場の仕事で体験のするプレッシャーや圧迫感よりも、脅迫的といっても過言ではないでしょう。試験の下準備が十分にできていなかった私の責任でもありますが（苦笑）。

英国の地で、0からどう生き延びて来られたかの話に戻りますが、思うに、英国は日本に比べて、見習いとして、または社員・フリーとして、劇場で働ける機会が外国人に開かれていると思います。欧州離脱と騒がれていますが、実力ある英国在住の外国人は、躊躇なく大御所の組織に雇われます。先週、ポルトガル人のフラットメイトがめでたく、英国国立劇場の専属照明プログラマーとして入社することになりました。祝！彼は、3年近く友人の家で居候しながら、ロンドンの小劇場で見習い・フリーランステクニシャンを続け、コネクションを増やし、3年ほど前にウエストエンドの劇場にNo2.照明技術者として就職しました。彼の勤勉さと、粘り強い我慢強さが、実を結んだ結果です。自分も、外国人差別なく見習いとして受け入れてくれた劇場や、裏方の知り合いの助けがなかったら、今の私はいません。きっとどこかでたれ死んでいたことでしょう。本当にありがたいことです。

現在、日本は外国人受け入れ態勢の見直し、規制改正が行われようとしていますが、人が足りていないという日本の現状、そして舞台業界で今後、日本人が外国人をどのように快く受け入れ、共に働いていけるようにできるかが注目です。それに向け、個々、そして社会全体で、国際的な視野と異文化を受け入れる柔軟さを養う必要性が、我々に求められているのかもしれません。



英語試験の風景